

審査の結果の要旨

氏名 千葉 創

本研究は End-of-Life(EOL)ケアの質を定量的に評価する Earle の質指標(QI: Quality indicators)を用いて、わが国における乳がん EOL ケアの実態を初めて評価したものであり、以下の結果・考察が得られている。

1. 本研究の対象患者 283 名（うち男性は 1 名のみ）において以下の 6 つの QI を算出した。QI(1): 最後の化学療法レジメンの開始時期は平均値で死亡前 324.0 日であった。QI(2): 最後の化学療法(経口抗がん剤も含む)施行から死亡までの平均値は 188.5 日であった。死亡前 180 日以内に化学療法の施行歴のある患者における最後の化学療法施行は死亡前 64.7 日であった。QI(3): 死亡前 90 日以内の急性期病棟への入院日数の平均値は 21.0 日(緩和ケア病棟の入院は除外しカウントせず、経口抗がん剤の内服はカウントした)。QI(4): 死亡前 90 日以内の平均入院回数は 0.9 回(計画的な化学療法のための短期入院は除外した)。QI(5): 死亡前 90 日以内の予定外の外来受診、緊急受診は 0.8 回であった。QI(6): 死亡前 14 日以内の化学療法の施行は全体の患者の 5.3%であった。

2. これらの QI は今後わが国における乳がん患者の EOL ケアの実態を属性の異なった患者集団同士で比較する際の比較対象となる。Earle の QI を用いて EOL ケアの質が定量的に比較されることで、ケアの質の向上のきっかけとなりうる。

3. 化学療法の有無、緩和化学療法の有無、死亡前 90 日以内の緩和化学療法の有無によってサブ解析を行ったところ、本来症状緩和、予後改善目的で行っている緩和化学療法であっても死亡前 90 日以内に施行されている場合には死亡前 90 日以内、30 日以内の急性期病院の入院日数延長、入院回数増加と関連し、患者の EOL ケアの質を低下させる可能性が示唆された。

以上、本論文は個々の患者のケアの質をミクロな視点で問う従来の研究とは異なり、マクロな視点から患者集団に対して提供されている医療の質を評価したものである。質指標は保険請求データなどから抽出できる項目も多く、今後ビッグデータの活用も期待される。本研究は今後のわが国の乳がん EOL ケアの質を相対化する第一歩として重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。